

## イザヤ書1章 預言の枠組み

### a 主題(預言の性質、範囲、問題点)(1:1)

1節 アモツの子イザヤの幻。これは彼が、ユダとエルサレムについて、ユダの王ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に見たものである。

旧約聖書のある部分を読む場合、その最初のことばは非常に重要である。それは単なる導入句でなく、紹介する部分全体の内容と性質を決定する場合が多い。イザヤ書1:1も、この後に続く預言の内容の性質と範囲と問題点を示している。原文では、<幻> (𐤇𐤍 ハゾーン) ということばが最初である。𐤇𐤍 ハゾーンは、動詞𐤇𐤍 ハーザー(見る)に由来し、「見たもの」の意。旧約聖書中35回用いられている。イザヤ書では、ここと29:7だけであるが、エゼキエル書(7:13,26,12:22,23,24,27,13:16)とダニエル書(1:17,8,1,2,2,13,15,17,26,9:21,24,10:14,11:14)に圧倒的に多いことは、両預言書の黙示的な性格から、当然のことと考えられる。しかし、𐤇𐤍 ハゾーンが、黙示的な預言にとどまらず、一般的な預言の意味に用いられることは、1:1と2:1を比較することによっても推論することができる。1:1の初めを文字通りに訳せば「(彼が)見たアモツの子イザヤの幻」である。2:1の初めを文字通りに訳せば「アモツの子イザヤの見たことば」である。「見たことば」では意味が通じないが、そのおかしさを通じて、預言の本質が明らかにされている。「幻」は見るだけではなく、聞くものである。一方、「ことば」は聞くだけではなく、見るものでもある。このことは、1章と2章の文脈も示している。1章では、2,10節に「聞け」と言われるから、聞くべき預言のことばも「幻」に含まれていることがわかる。それと対照的に、2:1の「先見のことば」は、2-4節の主の家の山の姿や、6節以下の高ぶったイスラエルをさばかれる主の御姿を描写的に示している。「幻」と言われようと「ことば」と言われようと、問題とされるのは、視覚と聴覚の相違ではなく、預言が、預言者の内面にある何ものかの産物であるのか、外から与えられたものかの区別である。これから1:2以下に宣べられることは、イザヤの理性とか感情とか宗教的直観力の産物ではなく、外から与えられたものであることが、「幻」という用語によって明らかにされている。そして、外から与えられる預言の内容が、イザヤの視覚を媒体とする時「幻」と呼ばれ、聴覚を媒体とする時「ことば」と呼ばれる。この後の預言の内容を検討してゆくとわかるのだが、もちろん、イザヤの理性、感情、体験を媒体としても、メッセージは与えられる。重要なことは、その起源が、イザヤという人間にではなく、イザヤの外にあり、外からイザヤに与えられ、イザヤ自身が媒体そのものとして、これを宣べ伝えるということである。

<幻>の内容は、<ユダとエルサレム>である。イザヤとほぼ同時代のアモスは、「イスラエルについて」(アモ1:1)と言って、イスラエルへの預言であることを明らかにしている。ミカは「サマリヤとエルサレムについて」(ミカ1:1)と言って、イスラエルとその首都サマリヤが除外されていると一応推測することができる。しかし、なぜ「ユダについて」

とか「エルサレムについて」だけにしないのか。ここで、イザヤの預言の神学が明らかにされる。すなわち、イザヤの預言は、エルサレムを中心にした同心円的な広がりを持つ内容である。9:8,9,12,14,10:9,20 などを見ると、イスラエルとその首都サマリヤについての預言も含まれているし、13章以下になると、ユダとイスラエル以外の隣国への預言も含まれているから、<ユダとエルサレムについて>という用語は、それ以外のものを排除するための表現ではなく、むしろ、それを含みつつ、ユダとその首都エルサレムへと焦点を合わせてゆくという預言の性格を明らかにする。

それはさらに、地域の範囲を示すだけでなく、イザヤの預言が、エルサレム中心の神学すなわちダビデ伝承を基盤にしていることを表明している。ダビデが初めてエルサレムを首都とし、そこに契約の箱を置いたのであって、それ以前は、エブス人の住む町にすぎなかった(サム5:6-9、歴11:4-8)。ダビデがこの町を首都にした理由は、地理的に、ちょうど、南のユダ、ベニヤミンと北のイスラエル諸族の中間地点に位置していたことと、政治的に人心を一新するためであった。それまでダビデがユダの王として住んでいたヘブロンは、南に寄りすぎていた。ダビデの故郷の町ベツレヘムも、サウルが首都としていたギブアも(サム11:4、15:34)、統一王国の首都としては貧弱すぎた。そこで、イスラエルのどの部族によっても占拠されていなかったエルサレムを、エブス人から奪って、新しい首都としたのである。ソロモンの死後、国が分裂して、北のイスラエルと南のユダに別れて後、イスラエルの王ヤロブアムは、由緒あるシェケムやペヌエルに首都を定め、また、金の子牛を造ってベテルとダンに安置し、人々がエルサレムの神殿に礼拝に行くのを妨げようと努力した。またオムリは、ティルツァを捨てて、サマリヤに新しい首都を開いた。それにもかかわらず、南北両王国の分裂時代を通じて、エルサレムが神によって選ばれた町であり、その立場は不可侵であるとの信仰はいよいよ深まっていった。そして、一方的な恩寵によってダビデが選ばれ(サム7章)、ダビデの信仰に従う者も同じ恩寵を受けるとする神学の場としての中心的性格を濃くしていった。イザヤ書1:1の冒頭のことばは、彼がこのダビデ伝承に立つ預言者であることの表明である。

預言のなされた時期は、<ウジヤ、ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代>と言われるから、少なくとも40年以上に及んでいる。それゆえ、預言は、いろいろな歴史的状況と、預言者自身の生涯の移り変わりを背景としてなされたのであり、その内容は、多種多様にわたることが推測される。

こうして、預言の性質と範囲が明らかにされてくると、問題点もおのずから明らかになってくる。それについては、注解のそれぞれの部分で明らかにされるが、第一に考えておかなければならないことは、1:1の主題がどこまで及ぶかということである。これを1章だけに及ぶとする学者(イブン・エズラ)、12章までに限定する学者(手塚儀一郎)もあるが、36-39章の歴史的叙述部分を初めとするヒゼキヤ治世の預言が13章以下に記されているから、ルター、ヤングなどにならって、全書巻に及ぶと考えたい。

b 創造神への謀反(1:2-3)

1:1の主題が、イザヤ書全体に及び、その性質、範囲、問題点の鍵を提供しているとなれば、1章は、預言の枠を提供していると言えよう。まず、神の創造のわざと、選びのわざを前提として、民の謀反と罪の状態があげられる。特に宗教上の偽善の罪が暴露される。それから、一方的な罪の赦しの福音が宣べられ、最後に、回心への招きがある。この1章の預言の枠の上に立って、2章以下の預言が構成され、展開していると言えよう。

2節 天よ、聞け。地も耳を傾けよ。

主が語られるからだ。

「子らはわたしが大きくし、育てた。

しかし彼らはわたしに逆らった。

2、3節は、3つの部分に分けられる。初めに、主のことばであることを示す決まり文句があり、最後に、創造神に対するイスラエルの民の謀反の罪が描写される。

<天よ、聞け。地も耳を傾けよ>という呼びかけは、単なる文学上の美辞麗句ではない(詩50:4、ミカ1:2)。ここでイザヤは明らかに申命記のことばを考えていた。40年間、荒野でイスラエルを導いたモーセは、自分の死期が近づいたことを知り、「天よ。耳を傾けよ。私は語ろう。地よ。聞け。私の口のことばを」(申32:1)に始まる最後の歌を歌い上げた。その数節前では、「私は天と地を、彼らに対する証人に立てよう」と言っている(31:28)。更に4:36では、「主はあなたを訓練するため、天から御声を聞かせ、地の上では、大きい火を見させた。その火の中からあなたは、みことばを聞いた」と言っている。これは、モーセがホレブ山で、燃える柴の中から語られる神の召しを受けたことと(出3章)、シナイ山で天から御声を聞いて、十戒を与えられたこと(出20章)とを指している。そこでイザヤが<天よ、聞け。地も耳を傾けよ>と語りだすとき、会衆は申命記律法の前に立たされるのである。「私は、きょう、あなたがたに対して天と地とを、証人に立てる。私は、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい(申30:19)との呼びかけは、イザヤの前に立つ会衆に直接迫ってくる。こうしてイザヤは、1:1で、ダビデ伝承に立つことを明らかにし、同時に、1:2で、モーセ伝承に立つことを明らかにした。しかし、ダビデ伝承が絶対恩寵の神学であり、申命記律法が「祝福か呪いか」の応報の神学であるとする、イザヤは、どうして両方の神学の上に立ちながら矛盾なくメッセージを伝えることができるのであろうか。私たちは、このような神学的興味に引きずり込まれながら、次のメッセージはどのような展開を見せるのかと、かたずをのむ。

主の語りかけであることを示す決まり文句が続く。<主が語られるからだ>。このことばによって、預言はイザヤの人間の意志から出たものでなく、主なる神から与えられたものであることが明らかにされた。イザヤは、同じような決まり文句を100回以上用いている

が、ここに見られる形は、厳密には、ここと 22:25,25:8 だけである。それは、接続詞<sup>㇀</sup>キーによって導入され、呼びかけの理由と根拠が示される。また、<sup>㇀</sup>ヘエロヒーム神)でなく、<sup>㇀</sup>ヤハウエ(主)という契約神を表す神名が用いられる。動詞は普通用いられる<sup>㇀</sup>アーマル(言う)でなく、<sup>㇀</sup>ダーバルの強意語幹で「語る」と訳されるが、<sup>㇀</sup>アーマルとそれほど違いはない。イザヤは使用されることの少ない<sup>㇀</sup>ダーバルを用いて、新鮮な注意を喚起したいようである。<sup>㇀</sup>ダーバルの強意語幹は、主と関係して次の箇所(1:2,20,7:10,8:5,16:13,14,20:2,21:17,22:25,24:3,25:8,37:22,40:5,58:14)。

主の語りかけの内容は、創造神に対するイスラエルの謀反の罪であるが、これは美しい三行詩(2 後半、3 前半、3 後半)になっており、1 行目の前半と後半が対比関係、2 行目と3 行目が対比関係になっている。また、2 行目と3 行目は、1 行目の後半を受けて、その内容を展開しているとも言える。まず1 行目であるが、<子ら>が目的語であるにもかかわらず、最初に置かれている。普通なら動詞の後に来るべきであるが、強調のために前に持ってきたのである。イスラエルは「神の民」(申7:6,14:2,21,26:18,19、詩50:7、イザ62:12)、「神の国民」(出19:6、申4:7,8,34)であるが、何よりもまず「神の子ども」(申14:1)である。この点で、イザヤはすでに、新約における神と人との関係を先取りしていたと言える(ロマ8:16,9:8,26、ガラ3:26)。神はイスラエルを<子>として選び、育て、大きくされた。

<しかし彼らはわたしに逆らった>。ここで<しかし彼ら>も、強意の位置に置かれている。神がイスラエルを選び育てられた愛と労苦に反比例して、イスラエルの神に対する背信の罪が浮き彫りにされる。<逆らう>( <sup>㇀</sup>パーシャ)は、ヘブル語の「罪」を表す三大用語の一つであり、(名詞形は<sup>㇀</sup>ベシャ、「そむきの罪」)、しかも最初のものである。旧約聖書中、動詞形で40回用いられており、イザヤは9回用いている(1:2,28,43:27,46:8,48:8,53:12,12,59:13,66:24)。これは、人がいったん結んだ契約を破ったり(列1:1)、そむいたりすること(列12:19)を意味する。神と人との関係について用いられる時は、もちろん「罪を犯す」ことであるが、それは神と人との人格関係が断絶し、更に神にそむき、神と争うまでに至っている(列8:50、エレ2:29、ホセ7:13等)。

3節 牛はその飼い主を、  
ろばは持ち主の飼葉おけを知っている。  
それなのに、イスラエルは知らない。  
わたしの民は悟らない。」

<牛はその飼い主を、ろばは持ち主の飼葉おけを知っている>。預言者は、罪をあばく時も、詩人であり、美的センスの持ち主であった。巧みなたとえを用いることによって、罪の姿はかえって鋭く示される。ここで<牛>や<ろば>と<イスラエル>が鋭く対照されている。単に動物と人間の対照ではない。動物の中でも一番鈍感な牛やろばが引き合いに出さ

れる。その反面、人間一般でなく、神によって選ばれたイスラエルはどうかと問いか  
けられる。イスラエルは、かつてヤボクの渡りで、「どうかあなたの名を教えてください」  
(創 32 : 29) としつこく御使いに迫り、ヤコブからイスラエルに名を改められた人物を先  
祖とし、その信仰にあやかっているはずである。そのイスラエルが、造り主を忘れ、贖い  
主を忘れてしまっている。

<民>もイザヤ書において重要なことばになっている。それは前述の「子」と関係し、  
また特に、40 : 1 の「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」と神学的なかわりを持っている。  
イザヤ書全体で約 130 回使用されるが、これが全書を通じて満遍なく使用されていること  
に注目せよ。

#### c イスラエルの罪の深さ(1:4-9)

4-9 節では、神にそむいた結果がどのような状況をもたらしているかが描写される。

4 節 ああ。罪を犯す国、咎重き民、  
悪を行なう者どもの子孫、墮落した子ら。  
彼らは主を捨て、イスラエルの聖なる方を侮り、  
背を向けて離れ去った。

感嘆詞 $\square$ ホーイ<ああ>で始まる。これは「わざわざ」と訳せば、感嘆の内容を伝える  
ことができる。イザヤは $\square$ ホーイをよく用いる(1 : 4, 5 : 8、11、18、20、21、22、10 : 1、  
17 : 12、18 : 1、28 : 1、29 : 1、15、30 : 1、31 : 1 等)。これは驚きとか嘆きとか嫌悪感  
を表す感嘆詞で、イザヤが 21 回用いているのに対し、他の預言者たちの場合は全部合わせ  
て 28 回であるから、イザヤが感情の豊かな人物であることを示しているようである。しか  
し一方では、「幸いなことよ」(30:18、32 : 20、56 : 2)という感嘆詞で始まる段落と比較す  
るとき、単なる感情の表れでなく、祝福と呪いの神学を考えていたかもしれない。そうで  
あれば「わざわざ」と訳さなければならない(詩 1 : 1、申 30 : 19)。イザヤが「ああ、  
わざわざ」とうめきの叫びをあげる対象は、4 つのことばで表現される。<罪を犯す国><  
咎重き民><悪を行なう者どもの子孫><墮落した子ら>である。第一のことばのみが、現在  
の行動を示す単純語幹分詞形を使用している。

<罪を犯す>( $\square$ ハーター)は、罪を表す三大用語の二つ目で(名詞形は $\square$ ハッタース、  
「罪」)新約の $\square$ ハマルタノーに当る。これの原意は「的を外す」である(箴 19 : 2、8 :  
36、ヨブ 5 : 24)。神から離れた人間は、どのような人生を送っても、結局は最終的な目標  
のない中途半端な存在であることを意味している。

<咎>( $\square$ アーウォーン)は、罪を表す三大用語の三つ目で、「ゆがみ」「ひずみ」を意  
味する。人の心と、ことばと、行為が、鍾乳洞の迷路のように曲がりくねっているのであ  
る。以上の三大用語のうち、 $\square$ ハーターの名詞形と動詞形は、旧約聖書中 600 回近く用い

られていて一番多く、次が、ゆがみを示す $\square$ アーウォーンの名詞形と動詞形で、244 回である。 $\triangleleft$ パーシャの名詞形と動詞形は 133 回で、一番少ない。

<悪を行なう者どもの子孫>は、申命記 1 : 35 に言われている「悪い世代」から、世々背信のイスラエル人を指している。しかし、彼らは<悪を行なう者どもの子孫>であるだけでなく、彼ら自身が<墮落した子ら>である。彼らがおも<子ら>と呼ばれているところに皮肉があり、また回心への望みがある（ 1 : 2、30 : 1、9、エレ 4 : 22 ）。

次にイザヤは、2,3 節の「創造神に対する謀反の罪」をもう一度展開する。しかし、その程度は更に深い。3 節では「知らない」「悟らない」であったが、ここでは<捨て><侮り><背を向けて離れ去った>と言われている。しかもその対象は、 $\square$ ヤハウエなる契約の神であり、<イスラエルの聖なる方>である。

<イスラエルの聖なる方>（ $\triangleleft$ ケドーシュ・イスラエール）は、イザヤ書の中心思想を表す重要なことばである。このことばは、イザヤ書全体で 25 回使用されており、前半の 39 章までに 12 回、後半の 40 章以下に 13 回出て来る（1 : 4、5 : 19,24、10 : 20、12 : 6、17 : 7、29 : 19、30 : 11,12,15、31 : 1、37 : 23、41 : 14,16,20、43 : 3 : 14、45 : 11、47 : 4、48 : 17、49 : 7,54 : 5、55 : 5、60 : 9 : 14）。29 : 23 では「ヤコブの聖なる方」といわれている。他の預言者たちは、エレミヤが 2 回（50 : 29、51 : 5）用いているだけであるから、全くイザヤ独自の表現である。おそらく 6 章の召命の経験が、この独自の表現を生み出させるに至ったのであろう（他に旧約聖書では 列 19 : 22 と詩 71 : 22,78 : 41、89 : 18 に用いられている）。

5 節 あなたがたは、なおも

どこを打たれようというのか。

反逆に反逆を重ねて。

頭は残すところなく病にかかり、

心臓もすっかり弱り果てている。

6 節 足の裏から頭まで、

健全なところはなく、

傷と、打ち傷と、打たれた生傷。

絞り出してももらえず、

包んでももらえず、

油で和らげてももらえない。

病気と重傷の人物描写は、イスラエルのたとえである。<頭>は身体の外部で最も大切な部分であり、<心臓>は身体の内部の最も大切な部分である。<足の裏から頭まで、健全なところはなく>は、申命記 28 : 35 を反映している。<絞り出す><包む><油で和らげる>は、当時の医療の方法を示している。ここでたとえられているのは、イスラエルが神

に反逆を重ねて、決して悔い改めようとしない姿である。彼らは神に懲らしめられれば懲らしめられるほど、かえって心をかたくなにして、神から離れていく。

7節 あなたがたの国は荒れ果てている。

あなたがたの町々は火で焼かれ、  
畑は、あなたがたの前で、他国人が食い荒らし、  
他国人の破滅にも似て荒れ果てている。

ここに描かれている国土の荒廃の状態は、申命記 28 : 51、29 : 22、23 の預言の成就である。歴史的にどの事件を指すというよりも、イザヤの時代までの戦争の災禍をすべて含むと見るほうがよい。イスラエルの罪の深さは、ソドムやゴモラと同じであり（創 18 : 16 - 19 : 29）、滅びの運命だけが残されていた。

8節 しかし、シオンの娘は残された。

あたかもぶどう畑の小屋のように、  
きゅうり畑の番小屋のように、  
包囲された町のように。

9節 もしも、万軍の主が、少しの生き残りの者を

私たちに残されなかったなら、  
私たちもソドムのようになり、  
ゴモラと同じようになっていた。

イスラエルの罪深さにもかかわらず、神は一方的な恩寵によってイスラエルを赦される。この救いは、3つの表現によって表明されている。第一は神の名称、第二は救いの対象であるイスラエルの名称、第三は「残りの者」の思想である。

<万軍の主> (𐤂𐤅𐤇𐤃𐤁𐤏𐤏𐤓) は、エゼキエル、ヨエル、オバデヤ、ヨナ以外の預言者たちが好んで用いた神の名称。𐤂𐤅𐤇𐤃𐤁𐤏𐤏𐤓は𐤂𐤅𐤇𐤃𐤁𐤏𐤏𐤓 (出かける) に語源を持ち、戦争に出かけるとか、星が夜空に出て来るなどの意味から、イスラエルの軍勢に関係する場合があります (サム 17 : 45) また御使いとかかわる場合がある (イザ 6 : 5、37 : 16)。また、天の星を示している場合がある (イザ 40 : 26、45 : 12、詩 33 : 6、ネヘ 9 : 6)。いずれにしても、この名称がここに用いられている真意は、神が、天地のすべての力ある者を支配する大能のお方でありながら、「あなたを祝福する」というお約束に従って、大能の御手を救いのために用いてくださることである。

<シオンの娘> (𐤂𐤏𐤔𐤏𐤏) 旧約聖書では、町が女にたとえられる場合がある (サム 20 : 19、イザ 47 : 1、アモ 5 : 2)。<シオンの娘> という表現によって、エルサレムは神によって選ばれた特別の町であり、優しさとしなやかさに満ちていることが示

される(イザ37:22、詩9:14、哀2:13、ゼパ3:14、ゼカ2:10等26回)

<残りの者>の思想は、イザヤ書における最も重要な思想の一つである(1:8,9、4:2,3、6:13、10:20-22、11:11,16、28:5、37:4,31,32、46:3、49:6)。語意については4:3注解。また、新約との関係については10:23注解。罪の深さから見れば、ソドムやゴモラと同じようにさばきの運命しか残されていないイスラエルが、一方的な恩寵により、神によって愛される娘のようにして、滅びの運命から救われ、残される。

イザヤは、ダビデ伝承すなわち恩寵の神学と、シナイ伝承すなわち祝福と呪いの神学に立つ預言者でありながら、しかも、古い伝承をそのまま固執し繰り返す伝承主義者ではなく、新しい意味を見出し、彼の時代に生けるメッセージを伝えた預言者であった。特に「イスラエルの聖なる方」と<残りの者>の二語は、イザヤの中心的思想の柱であって、その展開をこれから見てゆかなければならない。

#### d 宗教上の偽善の罪(1:10-17)

人間が創造神に謀反の罪を犯し、反逆に反逆を重ねると、常識では考えられない恐ろしい罪と墮落の道に入り込む。それは、セックスに、ギャンブルに、そして権力闘争に表れてくるが、そのクライマックスは宗教上の偽善である。ここでイザヤが宗教上の行事や犠牲そのものに反対したと考えることはできない。15節では祈りも否定されているからである。

10節 聞け。ソドムの首領たち。主のことばを。

耳を傾けよ。ゴモラの民。

私たちの神のみおしえに。

10節が前の段落とつながっていることは、<ソドム><ゴモラ>ということばが繰り返されていることから知られる。また、2節と同じように<聞け>という命令で始まっている。何を聞くかという、<主のことば>と<神のみおしえ(☒トラー)>である。「預言者は、ことばと律法を同じものとして考えている。それにもかかわらず、ここで預言者は意図的に律法という用語を使用したのだと確信している。それは彼らの手前勝手な意見に光を当てたためである。信仰と悔い改めを伴わない犠牲の供え物が神を喜ばせることができると想像することによって、彼らは律法の手前勝手な解釈をしているからである。これらのことばによって、モーセを引用しながら、イザヤは律法に何の新しいものも追加することなく、ただ神の御旨が何であるかを聞くことが必要であることを思い起こさせる」(カルヴァン)。多くの犠牲と宗教的行事に関するモーセの律法それ自体が無価値なのではない。また精神の伴わない形式的律法は無益だときめつけていると簡単に解釈すべきでない。11-14節の祭儀律法は、一つずつ丁寧に見てゆく必要がある。

- 11節 「あなたがたの多くのいけにえは、  
わたしに何になろう」と、主は仰せられる。  
「わたしは、雄羊の全焼のいけにえや、  
肥えた家畜の脂肪に飽きた。  
雄牛、子羊、雄やぎの血も喜ばない。

<全焼のいけにえ> (☒オーラー) は旧約聖書中最もよく出て来るいけにえのひとつで、280回以上用いられている(創8:20、22:2、レビ1:3等)。このいけにえの特徴は、血と皮以外のすべてを焼いてしまい、祭司も民もそれにあずかることがなく、すべては神に帰することである。<雄羊> (☒アイル) は、いけにえと食用と皮製品に用いられ、富と力の象徴とされた。<脂肪>と<血>はすべて主のものである(レビ3:16,17)。血は祭壇に注ぎ、脂肪は焼いて煙とした。<雄牛> (☒パル) は、牛を表す6つのヘブル語のうちで、特に若い良い牛を意味する。<子羊> (☒ケベス) は雄の子羊を指す(レビ14:10)。<雄やぎ> (☒アットゥード) も、いけにえと食用に用いられた。ここにあげられているものは、すべて最善のいけにえで、その血と脂肪はすべて主のものであるにもかかわらず、主はこれに<飽きた><喜ばない>と言われる。

- 12節 あなたがたは、わたしに会いに出て来るが、  
だれが、わたしの庭を踏みつけよ、と  
あなたがたに求めたのか。

- 13節 もう、むなしいささげ物を携えて来るな。  
香の煙 それもわたしの忌みきらうもの。  
新月の祭りと安息日 会合の召集、  
不義と、きよめの集会、  
これにわたしは耐えられない。

ここでは、宗教的行事について述べられる。ルターは言っている。「神はわれわれのわざを要求される。同時に、われわれのわざを要求されない。これは一体どういう意味であろうか。それは、これらのわざ(宗教的行事)が、あたかも必要とされることはなく、神が喜ばれることがないかのようにして、要求されているということである。」

<ささげ物> (☒ミヌハー) は、狭い意味では、血を流さない<ささげ物>の意味である(レビ2:1,4,5,6、6:14等)。しかしここでは、神へのささげ物一般を指している。<むなしいささげ物>とは、名においては「神へのささげ物」であり、実質においてはそうでないものの意味である。<香の煙> (☒ケトーレース) は、一般には<香>を意味するが(出30:1、レビ4:7、10:1) いけにえの煙を意味する場合もある(詩66:15)。ヤングは

後者の意味にとっている。

<新月の祭り>は月の初めの日で、この日に特別のいけにえをささげ(民28:11-14)、角笛を吹き鳴らし(民10:10、詩81:3)、日常の仕事を休んだ(アモ8:5)。  
<安息日>は7日目の休みの日であるが、これには2つの意義がある。一つは、神の創造のみわざとその完成を記念すること(出20:11) もう一つは、出エジプトの救いのみわざを記念すること(申5:14,15)。  
<会合の召集>は、動詞不定詞 $\square$ ケローと名詞 $\square$ ミクラーの合成形。  
<会合>は普通、 $\square$ ミクラー・コーデシュ(聖なる会合)出12:16、レビ23:2,3,4,7,8,21,24,27,35,36,37、民28:18,25,26,29:1,7,12)として用いられ、それ以外に用いられることはまれであるから(民10:2、イザ1:13、4:5、ネヘ8:8「読まれたこと」)、イザヤが「聖なる会合」を念頭においていたと考えてよい。  
<きよめの集会>( $\square$ アツァーラー)には、もともと、きよいという意味はなく、単なる「集会」の意味である。 $\square$ アツァーラーは、主のための集会であるが(レビ23:36、民29:35、申16:8等)かえって主の忌み嫌われる集会となった(アモ5:21)。

イザヤは、<新月の祭りと安息日 会合の召集>によって、日ごとと、週ごとと、年ごとの集会を表現し、それが主によって<耐えられない>と言われるほどの<不義と、きよめの集会>になったと言おうとしている。

14節 あなたがたの新月の祭りや例祭を、  
わたしの心は憎む。  
それはわたしの重荷となり、  
わたしは負うのに疲れ果てた。

<新月の祭り>と<例祭>は、前節の内容の繰り返しである。  
<例祭>( $\square$ モーアディーム)は複数形で、年ごとの定められた祭りを指している。それには、過ぎ越しの祝い、7週の祭り、仮庵の祭りの三大祭が含まれる。これらの祭り、すなわち「主のための聖会」を通して、イスラエルは、神との結びつきを確認し、新しく主の民となり、主はイスラエルの神となられる。しかし今、そのような「恩寵の手段」が、神ご自身の<憎む>ものとなり、<重荷>となってしまった。

15節 あなたがたが手を差し伸べて祈っても、  
わたしはあなたがたから目をそらす。  
どんなに祈りを増し加えても、聞くことはない。  
あなたがたの手は血まみれだ。

しかし、拒絶されるのは、いけにえと宗教的行事だけではない。  
<祈り>も拒絶される。  
<手を差し伸べて祈る>のは、祈りの一つの姿勢を示す(出9:29、列8:22、詩134:2、

哀 1 : 17、 テモテ 2 : 8)。旧約時代の人々は、普通立って祈った（ マル 11 : 25、ルカ 18:11,13）。またひざまずいて祈る姿勢もある（詩 95 : 6、ダニ 6 : 10、 使 21 : 5）。特別の場合に、地面にひれ伏して祈った（ヨシ 5 : 14、 マル 14 : 35）。しかし、手を差し伸べて祈る姿勢（出 9 : 33、 列 8 : 22、 38、 エズ 9 : 5）が他の姿勢よりも特に優れているという証拠はない。イザヤは他の箇所でも、祈りの聞かれることについて述べている（37:4、 38:5、 56 : 7）。聞かれる祈りと、聞かれない祈りは、旧約預言者たちの神学的課題の一つである。

16節 洗え。身をきよめよ。

わたしの前で、あなたがたの悪を取り除け。

悪事を働くのをやめよ。

17節 善をなすことを習い、

公正を求め、しいたげる物を正し、

みなしごのために正しいさばきをなし、

やもめのために弁護せよ。」

道徳的な勧めが、命令形によってなされる。16節では、消極的な面が4つの動詞によって命令される。<洗え><身をきよめよ><悪を取り除け><悪事を働くのをやめよ>。17節では、積極的な面が5つの動詞によって命令される。しかし、<善をなすことを習い>は次の4つの命令の出発点であり、土台であると考え、消極面4と積極面4の対比として見ることができる。16,17節の道徳的な勧めと、10-15節の偽善の宗教性の暴露を対比させると、3つの解釈の可能性がある。一つは、見せ掛けの宗教よりも実践が大切であるとの解釈である。第二は、偽善の宗教性が暴露され、人が悔い改めへと導かれるとき、善行が伴うべきであるとの解釈である（キッセーン）。もう一つは、すでに聖霊が聞く者の心に働き、悔い改めの実がここに描写されているとする（カルヴァン）。

e 罪の赦しの福音(1:18-20)

18節 「さあ、来たれ。論じあおう」と主は仰せられる。

「たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、

雪のように白くなる。

たとい、紅のように赤くても、

羊の毛のようになる。

19節 もし喜んで聞こうとするなら、あなたがたは、

この国の良い物を食べるができる。

20節 しかし、もし拒み、そむくなら、

あなたがたは剣にのまれる」と、

主の御口が語られたからである。

<来たれ> (◻レクー) は命令形複数であるが、必ずしも「来る」という意味をもたず、注意を喚起するだけの場合が多い( 創 19 : 32、士 19 : 11、サム 9 : 9、10)。何に注意を喚起するのか、次に続く動詞によって示される。10-17 節で、宗教上の偽善と道徳的な悪について思いをめぐらし始めた心は、<さあ>ということばによって注意を喚起され、<論じ合おう>と仰せられる主の前へと導き出される。

<論じ合おう>は◻ヤーカハの受身語幹で、原意は「人の前に立つ」であるが、そこから「明らかにする」「論じる」という意味になり、更に「責める」という意味にもなる(ヨブ 13 : 10)。神は<論じ合おう>と招かれるが、人は避けようとする( 創 3 : 8-10、詩 139 篇)。人は、自分の偽善と悪とが指摘されても、それが神の前にあからさまにされることを欲せず、自分で処理してしまおうとする。神と言い争うなら弁解の余地がないことを知っているからである。それで神は、一方的に議論を展開される。

18,19,20 節では、普通「もし」と訳される接続詞◻イムによって条件文が導入されている。しかし◻イムによって導入される条件文と、文節の後半が、内容的に正反対である場合、◻イムは<たとい>と訳すべきである(10:22、詩 139 : 8、ヨブ 20 : 6)。多くの注解者は、<論じ合おう>との誘いのことばは神のさばきを前提としているので、18 節の内容は、一方的な恩寵による罪の赦しの宣言とは考えない。18,19 節が一組になって、申命記 28:1-14、30 : 16 の祝福の条件を繰り返す、20 節は、申命記 28 : 15-68、30:17-18 の呪いの条件を繰り返している、と考える。ここでイザヤが申命記律法を考えていたことは、◻イムで始まる条件文と、19,20 節の用語が申命記の祝福と呪いの用語に似ていることから明らかである。しかし、<たとい、あなたがたの罪が緋のように赤くても、雪のように白くなる。たとい、紅のように赤くても、羊の毛のようになる>という独自の表現を、4 つの◻イム文節の最初に置くことによって、イザヤは、申命記の祝福と呪いの神学を超越している。

<緋>は◻シャーニーで、<紅>は◻トローラーである。◻トローラーはえんじ虫の一種の昆虫で、雌は赤い物質を含んだ卵を産む。それを染料に用いるが、それを◻シャーニーと称する。幕屋の垂幕、大祭司の祭服、重い皮膚病のきよめの儀式などに用いられた。この語は旧約聖書に 42 回も用いられているが、罪の形容としては、ここだけである。<雪>は旧約聖書に 20 回用いられ、たとえとしては重い皮膚病の症状を表す(出 4 : 6、民 12 : 10、列 5 : 27)。罪の洗われた状態のたとえとしては、ここと詩篇 51 : 7 だけである(哀 4 : 7)。<羊の毛>(◻ツェメル)も、旧約聖書に 16 回用いられながら、罪の赦された状態のたとえとしては、ここだけである。それゆえ、18 節は全くイザヤ独自の表現であることがわかる。<さあ、来たれ。論じあおう>と招かれたたましいは、当然、17 節までの罪と悪について責められると覚悟し、神のさばきの宣告が下されるであろうと恐れおののく。ところが、聞かされるのは一方的な罪の赦しの宣言である。

更にイザヤは、18 節の◻イム文節により申命記の祝福と呪いの神学を超えただけでなく、19,20 節の◻イム文節では、申命記文学の枠を利用しさえしている。19 節の<もし喜んで聞

こうとするなら>は、申命記では律法にかかわっていたが(28:1)、ここでは18節の福音にかかわる。20節も、申命記では律法にかかわっていたが(28:15,58,30:17)、ここでは福音にかかわる。しかも、この福音宣言は、<主は仰せられる><主の御口が語られた>という二重の表現によって囲まれ、神である主の一方的宣言であることが強調されている(22:14,25,40:1-5)。

f 回心への招き(1:21-31)

21-31節は、新改訳では4つの段落に分けられているが、新共同訳では2つに分けられている。レニングラード写本では、21-23節と24-31節に分けられている。ヤングは、18-23節を一区切りにして「悔い改めへの招き」とし、24-31節を一区切りにして「来るべきさばきの宣言」とする。手塚氏は21-26節を「エルサレムの墮落と清めの刑罰」とし、27,28節を「あがなわれる者と滅びる者」とし、29-31節を「偶像信者のうけるはずかしめとその運命」とする。ランゲは、この部分を一まとめとして「過去、現在、未来の全体的展望」とするが、これは最もよく全体を把握しているといえよう。本注解では、1章全体の構造から見て、ひとまとめにして「回心への招き」とした。18-20節で、罪の赦しの宣言がなされ、「主の御口が語られた」と強調された後、イザヤは立場を変えて、イスラエル人の一人として発言する。

21節 どうして、遊女になったのか、忠信な都が。  
公正があふれ、正義がそこに宿っていたのに。  
今は人殺しばかりだ。

初めのことば、<どうして>(⊠エーカー)という疑問詞によって、預言者は、論理的な答えを要求するのではなく、感動を表現している。<どうして、遊女になったのか、忠信な都が>は、ヘブル語で5つの単語から成り立っているが、いずれも語尾が「アー」という長母音で終わっている。「ああ、かつては公正と正義に満ちていた忠信な都エルサレムが、ああ、今は・・・」とイザヤは嘆くのである。<遊女>のたとえば、ホセア書のように、神への不信を指す。

22節 おまえの銀は、かなかすになった。  
おまえの良い酒も、水で割ってある。

<かなかす>は⊠シーグの複数であるが、かなかすそのものを指す場合と(箴25:4)、不純物の多い金属を指す場合がある(エゼ22:18-19)。ここでは、22節後半、25節と比較するとき、後者にとるほうがよい。神によって選ばれた都エルサレムは、住民、道徳、宗教、社会秩序のすべてにおいて純粋であるはずであった。

23節 おまえのつかさたちは反逆者、盗人の仲間。  
みな、わいろを愛し、報酬を追い求める。  
みなしごのために正しいさばきをせず、  
やもめの訴えも彼らは取り上げない。

16,17節の繰り返しであるが、18-20節の福音を聞かされた後であるから、思想は一段と深まっている。

24節 それゆえに、 万軍の主、  
イスラエルの全能者、主の御告げ  
「ああ。  
わたしの仇に思いを晴らし、  
わたしの敵に復讐しよう。

ここから、再び神の直接のメッセージが伝えられる。ここで再び<万軍の主>( 1:9) という神の名称が繰り返されると共に、<イスラエルの全能者>という名称も併置される。この名称は、旧約聖書中この箇所以外には用いられていない。類似の「ヤコブの全能者」も、5回用いられているだけである(創49:24、イザ49:26、60:16、詩132:2,5)。いずれの場合にも、救いのために働いてくださる大能の神を表している。もう一つ、<主>(アードーン)が併置されているが、これは絶対の主権者を表し、いつもさばきや警告と関係して用いられている(3:1)。<ああ>(感嘆詞ホーイ)は、「わざわざいだ」とも訳すことができる(1:4)。21-23節のイザヤの嘆きに和して、神も「ああ、わざわざいだ」と言われる。神はすべての罪を罰し、罪人をさばかずにはおられない。

25節 しかし、おまえの上に再びわが手を伸ばし、  
おまえのかなかすを灰汁のように溶かし、  
その浮きかすをみな除こう。

初めの接続詞ワウを「そして」と訳すか<しかし>と訳すかには、微妙な違いがある。24節の「仇」と「敵」は、イスラエル人であり、エルサレム人であり、特にその指導者たちであって、神はこれに「思いを晴らし」「復讐しよう」と言われたが、そこで終わるのではない。接続詞ワウは、そこで終わるのではないことを示すのに重きを置けば「そして」と訳され、さばきを超えた神の目的に重きを置けば<しかし>と訳される。不純物の多い金属が、ちょうど<灰汁>に溶かされて精錬されるのと同じように、さばきも神によって用いられる。17節までに示されたように、人は、不信仰と罪と偽善と悪を暴露されても、それで、

悔い改めて神に立ち返り、正しくなれるわけではない。それゆえ、イザヤも、神も、嘆くより仕方がない。しかし、人の側からは不可能であっても、神の側からは可能である。神は、罪に対するさばきすらも、聖化のためにお用いになる。

26節 こうして、  
おまえのさばきづかさたちを初めのように、  
おまえの議官たちを昔のようにしよう。  
そうして後、  
おまえは正義の町、忠信な都と呼ばれよう。」

24-26節には、神の一方的な働きが6つの動詞で示されている。その最終的な目標が、<昔のようにしよう>ということである。回心への招きにおいても、働いてくださるのは神ご自身である。

27節 シオンは公正によって贖われ、  
その町の悔い改める者は  
正義によって贖われる。

ここでは、神の救いの原則が示される。<贖う>(⊖パーダー)は、代価を払って得られる救いを示すのに用いられる(出13:13、民18:15-17等)。ここでの代価は<公正>(⊖ミシュパート)と<正義>(⊖ツェダーカー)である(5:15-16)。これはイザヤ書における神学思想を示す重要な用語であって、人間社会の<公正>と<正義>を守ることに失敗した。そこで神はみずから代価を払って、シオンと、シオンに住む新しい民を買い取られる。その代価は、神の⊖ミシュパートであり⊖ツェダーカーである。一言で「神の義」と意識することもできる。

28節 そむく者は罪人とともに破滅し、  
主を捨てる者は、うせ果てる。

28-31節の内容は、前の部分と密接に関係している。28節の初めは接続詞ワウで始まっているから、「しかし」と訳しておくほうがよい。救いは神の贖いのみわざによる。しかし、滅びは人の不信仰と不義による。

29節 まことに、彼らは、  
あなたがたの慕った櫨の木で恥を見、  
あなたがたは、

みずから選んだ園によって  
はずかしめを受けよう。

接続詞<sup>△</sup>キー(<まことに>)で始まり、前節の内容を展開する。<榿の木>(△<sup>△</sup>アイル)は、「大きな高い木」のことで、榿か、テレビンか、なつめやしであろう(57:5、61:3)。<榿の木>も<園>も複数である。唯一の主なる神は、ご自分の民イスラエルを選んで、これを喜びとされるが、イスラエルは、この地上のいろいろのすぐれた高い木や園を<選び>、それらを<慕う>( 57:5、65:3、66:17)。

30節 あなたがたは葉のしぼんだ榿の木のように、  
水のない園のようになるからだ。

31節 つわものは麻くずに、  
そのわざは火花になり、  
その二つとも燃え立って、これを消す者がいない。

滅びの状態がたとえで示される( エレ4:4、17:27、エゼ20:47、ホセ4:19、アモ5:6)。

28-31節は、単なるさばきの宣言でも、脅迫による悔い改めの勧めでもない。1章全体の構造から見ると、18-20節の福音宣言に続く回心への招きの一部を構成していることがわかる。それはイザヤ書66章の最後が「火のさばき」で結論付けられているのと同様で、1章は預言の枠を提供しているから、さばきの宣言の意味を知るための示唆となっている。